

母子保健における助産婦のあり方に関する研究 分担研究報告書

分担研究者 小野寺 伸 夫

<リサーチ・クエスチョン>

- 1.開業助産婦の機能充実のためのモデルシステム開発について
- 2.病院等施設に働く助産婦の機能充実と地域への貢献策について
- 3.助産婦の生涯学習システムの開発について
- 4.新しい助産婦の役割モデルについて

<研究目的>

少子化時代の家庭や地域の育児機能とリプロダクション様式の変化に対応した地域母子保健推進に貢献する助産婦の新しい役割と助産所の活用が求められている。本研究班は、助産婦の専門性、地域社会のニーズ、助産婦・助産所の有効活用と助産婦の生涯教育に関する多角的な検討を通じて助産婦活用の方向性と課題を明らかにした。さらに今年度の研究では、新しい助産婦の役割と助産所の活用ならびに助産婦の生涯教育のモデル開発の基礎データ作成を目的とした。

<研究方法>

- 1.助産婦の将来推計
- 2.地域母子保健における助産婦・保健婦業務の実態調査
- 3.開業助産婦の新しい役割モデルの分析調査
- 4.医療施設内助産婦の産褥期ケアを含めた地域貢献モデルの検討
- 5.産科学・助産学の発展に伴い期待される助産婦機能の分析
- 6.助産婦教育のあり方と卒業生の就職状況および生涯学習の国際比較
- 7.助産婦におけるキャリアパス分析と人材開発システムの考察
- 8.助産婦の新しい役割と活動発展方策の検討

<研究結果>

1. 助産婦の将来推計

就業助産婦は、①1970年以来5年間毎の減少率が增大している。

②年齢階級別では、20歳代の減少率は小さく、30-40歳代では就業数が増加してきたが、その傾向は1985年以後弱まった。また50歳以上の減少率は増大している。

③助産婦免許取得数はほぼ横ばいに経過しているが、高い減少率が将来も続くと助産婦活動の継承が困難になりかねない。

2. 地域母子保健における助産婦・保健婦業務の実態調査

①助産所では、正常な妊娠から産褥期までの一貫したケアを提供しているが、助産婦の高齢化のため業務が縮小傾向にあり、業務拡大意欲の高い群と低い群の二分化がみられる。

②診療所では助産婦が少なく、分娩介助業務が中心で保健指導機能が弱い。

③病院では20-30歳代の助産婦が多く助産婦業務拡大への意欲が高いが、現状は来院と入院時のケアに限られ、地域母子保健事業への参加状況は低い。

④保健所・市町村では思春期や調査研究活動を含む幅広い母子保健活動が展開されている。これらの活動は保健婦が中心となり、保健所の常勤助産婦は少なく非常勤として活用されている。市町村でも助産婦は活用されているがその割合は低い。

3. 開業助産婦の新しい役割モデルの分析調査

全国のモデル的な活動をしている開業助産婦を対象に活動分析および産む側からみた心理・社会的ニーズの分析から次の点が明らかにされた。

①開業の形態は有床で分娩業務・産褥入院の受け入れ、無床で乳房ケアを主とした保健指導業務に分けられた。

②業務内容は、妊娠・分娩・産褥期の管理にとどまらず、乳幼児期・思春期・成熟期・更年期・老年期の保健指導へと業務の拡大を示している。

③産褥訪問、地域の子そだて支援組織づくり、地域・学校保健への参加がみられている。

④助産所で出産した女性へのモデル調査では、出産の満足度が高く次回も助産所での出産を希望する割合が高かった。

4. 医療施設内助産婦の産褥期ケアを含めた地域貢献モデルの検討

①全国の施設助産婦のモデル的な活動事例マップを作成した。

②助産婦の退院時アセスメントとケア計画にもとづくモデル調査で退院後1月間の継続指

導の有効性を評価し、施設助産婦の訪問指導体制整備の必要性を確認した。

③退院後の母乳栄養確立への施設助産婦の活動事例から、地域における母乳栄養推進の技術的方法論を導いた。

④公的病院に勤務する助産婦の地域母子保健相談指導事業評価を通じ、助産婦活用の課題点とその対応構想を示した。

5. 産科学・助産学の発展に伴い期待される助産婦機能の分析

①自然分娩、母乳保育推進について積極的な機能拡大の期待が大きい。

②超音波断層法・分娩監視装置など新しい診断技術の不足、医療事故訴訟への対応の不安が課題となっている。

③助産婦機能拡大のための必要条件として、医師との協力体制による医療事故訴訟への対応・妊婦の病院指向と医師指向・異常妊娠や分娩合併症への対応が課題である。

6. 助産婦教育のあり方と卒業生の就職状況および生涯学習の国際比較

①ICM加盟国の助産婦団体に対して、各国の母子保健の現状、助産婦制度、助産婦教育システム、助産婦業務の現状と将来性について調査し、国際比較を検討中である。

②助産婦学校・短大専攻科を過去20年間に卒業した者の調査では、現在約80%が就業しており、卒業後15年までの卒業生の就業率75-80%に対し15年以上はさらに高い。

③就業先の選択は、出身校系列の病院や教員の示唆を得ての選択が比較的多く、その他の選択理由には身分の安定・交通の便・勤務時間を上げている。

④生涯教育へのニーズは高いが、自主的な研究・学習会への参加型は少なく、体系的な学習機会が整備されていない。

7. 助産婦におけるキャリアパス分析と人材開発の考察

①助産婦のキャリアパス研究の概念図を作成し、浮沈図調査から開業助産婦のキャリアパス上の課題点を検討し、キャリアパス促進要因として自然分娩の理論と技術等を上げた。

②モデル的な施設内助産婦生涯教育事例から、院内教育の基本的整備事項を抽出した。

8. 助産婦の新しい役割と活動発展方策の検討

時代のニーズに対応したモデル的な助産婦活動展開を全国122事例について分析した結果、

①病院助産外来からのプライマリ助産、②施設内助産活動と地域母子保健活動との連携、

③地域での助産婦のグループ活動について、各々多数の先駆的活動例を確認できた。

<今後の研究課題>

1. 助産婦の将来推計

大学等今後の助産婦教育の動向を踏まえた助産婦の将来推計。

2. 地域母子保健における助産婦・保健婦業務の実態調査

①助産所機能充実強化要因の検討。②診療所の保健指導機能を充分するための各機関の連携のあり方の検討。③病院助産婦の有効活用条件の検討。④地域特性に対応した助産婦業務分担のあり方の検討。

3. 開業助産婦の新しい役割モデルの分析調査

①開業助産婦に対する多様な住民ニーズへの対応方策の検討。②開業助産婦活動の特性に応じた役割分担についての検討。③開業助産婦活動に対する計画的組織的支援体制の検討。

4. 医療施設内助産婦の産褥期ケアを含めた地域貢献モデルの検討

①地域貢献モデルの成立条件と応用方策の検討。②地域母子保健特別モデル事業における助産婦活用のあり方の検討。③地域保健医療計画と整合性のある地域貢献策の検討。

5. 産科学・助産学の発展に伴い期待される助産婦機能の分析

①助産婦機能拡大のための必要条件への対応策の検討。

6. 助産婦教育のあり方と卒業生の就職状況および生涯学習の国際比較。

①国際比較を通じてのこらからの助産婦教育制度の具体策の検討。

7. 助産婦におけるキャリアパス分析と人材開発の考察

①助産婦の生涯学習のモデルの検討。③助産婦の政策形成に必要の人材開発の方向性の検討。

8. 助産婦の新しい役割と活動発展方策の検討

先駆的な助産婦活動事例の発展の方向性と課題の検討を通じて、今後の助産婦活動の発展を促す方策を上げる。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



<リサーチ`クエスチョン>

1. 開業助産婦の機能充実のためのモデルシステム開発について
2. 病院等施設に働く助産婦の機能充実と地域への貢献策について
3. 助産婦の生涯学習システムの開発について
4. 新しい助産婦の役割モデルについて

研究目的

少子化時代の家庭や地域の育児機能とリプロダクション様式の変化に対応した地域母子保健推進に貢献する助産婦の新しい役割と助産所の活用が求められている。本研究班は、助産婦の専門性、地域社会のニーズ、助産婦・助産所の有効活用と助産婦の生涯教育に関する多角的な検討を通じて助産婦活用の方向性と課題を明らかにした。さらに今年度の研究では、新しい助産婦の役割と助産所の活用ならびに助産婦の生涯教育のモデル開発の基礎データ作成を目的とした。